

世話部にいる親戚に私の消息をいろいろ聞いてくれています。が、「生きているか、死んでいるかは分からない」と言われていたようだったので、私の顔を見た家族はやっと安心したのです。

近所の人とインドネシアで会ったので、その留守家族にも話し、喜んでもらえました。その後その人も帰って来ました。六月ころ、マラリアで四〇度ぐらいの熱が、二、三回くらい出て苦しんだのですが、山へ入り一冬越したら出なくなりました。

本年は戦後五十年、我々は現地のワスレ湾を記念し「ワスレ会」という戦友会を作っています。五月に四十何年ぶりで飯坂の会に参加しました。「羽田は栃木の開拓団で苦勞している」ということを戦友が知っていてくれて、乾杯の音頭をさせられました。故郷を離れたが、後継者もおり、牛頭七〇頭飼って幸せに生活しています。

フリーピン・ルソン決戦

虎兵団の任務は終わった

静岡県 志村 登

私が信頼し生死苦楽を共にした戦友の大半は戦死してしまいました。何とも致し方なかった。戦争を憎む心と、戦友よ安らかに御冥福をと謙虚な心で祈るのみです。

全員死を覚悟して戦った凄惨なルソンの戦場から、私は武運強く生還することができた。正に九死に一生を得たからであります。これは運不運もあるが、初年兵時代の教育により忍耐力を身につけたお陰であり、ルソンの山岳戦で人間極限の生き地獄のような戦争体験で強い精神力と体力の限界を得たからであります。う。また、復員後、裸一貫から祖国再建のため、ただ夢中で働き続けられたのも、軍隊生活で体得した精神力に支えられた所以ゆえんと信じております。

そのルソン島での終戦前一カ月ぐらいからの極限の状況についてお話をいたします。

昭和二十年七月下旬だというのに、毎日のように雨が降っていました。戦況はますます悪化し、物量に物をいわせる米軍の大部隊が進撃につぐ進撃でバギオからアラブへと進み、我々の陣地近くまで迫って来ました。敵は我が虎兵団に集中攻撃をかけてきた。

食糧はますます困窮して、このままでは生きて行くことさえ危ない。飢えて死ぬ兵を目の当たりに見、そこで覚悟を決めたのです。どうせ食糧は無いのに敵は増強される一方です。飢えて死ぬより、乗るかそるか斬り込んで敵に一矢を報い、あわよくば敵の食糧を奪ってこようと考え、小回りのきく斬込隊が編制されました。

一個分隊五名。元気な者を選んで三個分隊が編制されました。五人一組の分隊は死出の旅路を共にするという意味で仲の良い者同志で組んだのです。服装は帝陸軍の恥をさらさぬようと、残留の戦友から借り

て一応整え、武器は拳銃と三人に一丁の小銃。あとは各人手榴弾二個を腰にぶら下げて、夜になるのを待ち粛々と星明かりの中を間道づたいに山を降りました。

途中、谷川の水で別れの盃をお互いに交わしたが、別に悲しくありません。だれもが瘠せた体で目ばかりギョロギョロしているだけ、こんな体力では、生きて再び日本の土を踏めるとは思っていません。今更、言い残す言葉もなく、伝えてもらうこともありません。

第一、この体では精神状態も朦朧として考える力も失せていました。ろくに物を食わずにいるのに食欲も余りなく、ただ何か食べないと死ぬという気持ちと、敵陣に斬り込めば、うまくいけば何かうまいものが食べられるに違いない。それと、亡き戦友の仇討ちにもなる。他には何も考えていません。

斬り込み戦法は、いかにベテランといえども、その場面、状況によって違うので、状況に合わせて作戦をとるのです。前に斬り込みをした経験を生かし、失敗せぬよう慎重に事を運ぶ。常に警戒を怠らず静かに静かに地面を這うようにして一歩一歩進み、敵陣三〇メ

トトルくらいという所で、各分隊は散開しました。

山頂には壕があつて、その向こうに幕舎がある。はやる胸を押えながら、二〇分ほど静かに様子を探る。

皓皓と電灯を灯して、ドンチャン騒ぎをやつて歌など歌っているようでした。「よし、今だ」と合図をし、藪から這い上がつて、一斉に幕舎めがけて手榴弾を投げると、ドンチャン騒ぎは、たちまち悲鳴と泣き声の修羅場と化しました。「ワー」と突撃の声をあげて、幕舎に向かうとアメリカ兵は一人残らず林の中へ逃げ込んでしまいました。

幕舎の中には負傷した米兵が二、三人いたが、転がるようにして這い回っていました。自動小銃や、その他の兵器も置き去りにしてありましたが、そんな武器には目もくれず、いきなり食物を口に押し込み、食糧だけを袋いっぱい積み込んで大急ぎで引き揚げました。敵の陣地を後に一目散に山を下り、谷間で点呼しました。一人の犠牲者もなく大成功で「ホッ」としました。ただ逃げる時に藪で転んでちよつと捻挫した程度です。重いほどのお土産を背負つて意気揚々と陣地に

戻つたのでした。陣地では、無事帰隊した私たちと戦利品のお土産を見て、「万歳」で迎えてくれました。

「良かった良かった」と涙を流して喜んでくれました。

戦利品のアメリカ給与の食糧は取つてきた者が分配することになつてゐるのです。特に上官と兵の区別なく、分配されます。久しぶりに栄養のある食物を食べたせいか、一時的にせよ急に元気が出たような気がしました。

ほとんど毎日空襲があり、爆弾の他に宣伝ビラを撒くことが多くなり、いずれも謀略的なものばかりであつた。「日本軍の斬込隊に告ぐ」の見出しでビラが撒かれました。「日本軍は正攻法で戦争せよ。斬り込み戦法は卑法で野蛮なやり方だ。ただちに中止せよ。もし中止せねば毒ガス弾を投下する」などの内容で、これらを見ても、当時我が軍の斬込隊戦法は、米軍、特に第一線將兵の間では余程恐れられていたことが証明されます。

八月十五日、この日は雨がしとしとと降つていました。朝から迫撃砲や銃声もなく、雨降りて米軍は休ん

でいるのだらうなどと話し合っていたところ、雨中を食糧を探しに行った兵隊が慌てて帰ってきました。「大日本帝国は、天皇の命により……」という終戦のビラを拾ってきたのです。

「なんだ例のごとく、デマ宣伝のビラか。とに角、敵はいろんな手を使うから謀略にまどわされぬように」と信用はしていなかった。既に覚悟は決まっていた。最後の一兵になるとも持久戦に持ち込み、やがて態勢を整え、内地から空軍が増援にやってくることを信じていました。日本は最後には必ず勝つと信じていました。

どんな内容の宣伝ビラを見ても一笑にふし、敵もいろいろな手を使って第一線將兵の精神錯乱を図ったかと、ビラを破ったり鼻紙に使ったりしていました。雨が止んでも静粛そのもので、晴れた日は定期便のごとく砲弾・爆撃と必ずあったのにバツタリと攻撃が止まってしまう。なんだか様子が変になってきたことは確かである。おかしいなあと思うようになりました。

しかし、だれ一人として日本が降伏するなどと考える者はいない。また、「天皇陛下の命により……」のビラを信用して、謀略にかかり降伏行動に入ったらとんでもないことになる。もう既に軍服は破れ、靴もなく裸足の姿をしていますが、軍人精神の充実した立派な帝国軍人である。戦陣訓に示されてある戦陣の戒めその二の項に「名を惜しむ」の所で明確にされ、私たちが軍人の頭の中にしみこまされているのです。

「恥を知る者は強し、常に郷党家門の面目を思いよいよ奮励して、その期待に答うべし又死する時に死なず生きながらえて虜囚の辱を受けず。死して罪禍の汚名を残すことなかれ」と。要するに、降伏して捕虜となることは軍人としても恥ずべきことで、その時は自決せよと強く教育されました。それが日本軍隊を統帥する大元帥陛下が米・英・露・中のボツダム宣言を受諾して降伏するなど、とても考えられず、これは、完全な敵の謀略だと、とにかく信じられませんでした。

当時、我が隊にも無線機はあっても、使用不能で、

部隊相互の連絡も思うようにとれず、明確な真の情報
が分からずのまま、ただ、ひたすらに自分の都合の良
いように理解している事だけが、心の支えであったの
です。

しかしながら、その後も連日米軍機が低空しながら
ビラを撒いたり、米軍二世が拡声器で片言まじりの日
本語で

「モウネセンソウハ オワツタノデス。ムダナテイ
コウハヤメテ ヤマヲオリテ キテクダサイ。アナタ
タチノ センユウハ モウ ヤマヲオリテ アメリカ
ガンノ キャンプデ タベモノ シンパイナク セイ
カツ シテイマス タダチニヤマヲオリテ キテクダ
サイ。アナタチノセンユウ シンパイシテイマス
ワタシハ アナタタチト オナジ ニッポン……イノ
チヲタイセツニ シテクダサイ」

と、憎らしいほど落ち着いて、何回も何回も同じこと
を放送しながら旋回していくのです。小銃で撃つても
届く程の低空を飛ぶ。怒って小銃で撃った兵もいたが
命中せず、そのまま遠くへ飛んで行ってしまいました。

くる日もくる日も同じような繰り返し、その都度謀
略に乗るな命令があつたので慢性になつてしまいま
した。幸いに全く攻撃がなくなつたので陣地は病人に
任せて、元氣な兵は食糧調達に全力を挙げ、体力を増
強することに専念しました。

何日かが過ぎ、常に警戒していた敵陣地から、突然
白旗を掲げて、軍使らしい者が数名我が陣地に向かっ
て山を登つて来るのです。一息に来るのが危険と思つ
たのか、小高い丘に留まり手旗で信号を送つてきたの
です。双眼鏡で確認したら、明らかに、日本の通信兵
の合図です。

「モウセンソウハオワツタ レンラクツイタ プタ
イハ モウ ヤマヲオリタ キプタイダケダ ハヤク
ヤマヲオリヨ」

と、同じことを反復送信しようとしているので、あい
つはスパイだ。撃つてしまえと数発小銃で撃つたら、
一目散に逃げていってしまいました。

後で隊長から、嚴重な注意があり、たとえいかなる
理由があつても、戦場において、白旗を掲げて来る軍

使に対しては、国際条約により危害を加えてはいけな
いことになっている。みだりに撃つてはいけない、と
強く戒められました。

翌日、はからずも昨日と同じ場所に白旗をかかげた
軍使が現われ、また手旗信号を送信してきました。今
度はおとなしく見守っていますと、何回も反復送信し
てきました。内容は、

「戦争はもう終わった。これ以上戦闘続行する事は
犠牲者を出すばかりです。我々も同じ日本軍として戦
友を見殺しにはできない。是非詳しい連絡がしたいの
で、貴陣地に行きたい。返事を乞う」

とのことでした。隊長も意を決し「よし、呼んで一応
事情を聞こう」ということになり、早速、我が方の通
信兵に命じ、了解承知の返事を出し、返事のくるのを
待ちました。

一時間ほど経って汗をかきかき、白旗を先頭に友軍
の将校一名、下士官三名、米軍二世下士官と日本の通
信兵と全部で十名が登って来ました。そこで初めて、
日本がポツダム宣言を受諾して降伏したことを説明し

てくれたのです。「まさか、そんなことがあるはずは
ない」たとえ、それが真実と言われても、信じたくな
いの思いがいつぱいでした。もう既に連絡の取れた友
軍各部隊は山を下り、米軍指揮下に入りキャンプ（収
容所）で米軍の給与を受けていることも説明をしてく
れました。

第十四方面軍司令官山下大将も九月三日にバギオで
調印式を行うために、八月三十一日、既に山を下りて
いたこともその時初めて知ったのです。しかし、それ
でもまだ信用ができないので、実際にこの目で確かめ
たい旨を申し出、我が隊からも軍使として将校一、下
士官一、兵五名を一緒に行かせ実情を確かめることに
なつたのですが、その時は体に故障のある者が多く、
元気な兵五名を選ぶのに苦勞もあつたし、随行する兵
の服装を整えるのにも大変でした。

最後まで頑強に抵抗した部隊の将兵が、こんな姿を
していたかと笑われないようにと、懸命につくろうの
でした。私もその役に是非と申し出ましたが、人事係
准尉は「もし、万一のことがあつてはいけません。とに

かくお前は残つて欲しい」といわれ、その一行には参加できませんでした。我が方の軍使がどんな報告を持つて来るか心配でなりません、本当に長い一日でした。やがて帰隊した軍使の報告は、「戦争が終わつたのは確かで、收容所は早く連絡のついた部隊の兵隊で混雑している。被服は米軍のものが支給され背中にPWとペンキで記されているのを着用し、兵隊たちは幕舎の中で休んでおり、病人の看護をしている兵隊も見受けられた」とのことでした。

なお、米軍からの指令で、我が部隊も十月二十六日までに山を下りない場合は、止むを得ず残敵掃討を実施するとまで申し渡されたとのことでした。その他、武装解除の方法や、病人の護送についても、その他細部に関する指令を書類に列記したものを隊長に報告されたのです。

全報告を聞くまでは、全員瘠せ衰えた体で眼を異様に光らせ、かたずをのんで聞いておりました。話が終わつてもだれ一人声を出す者なく、顔も青ざめ、一度に体の中の力が抜けたようになりました。我々の最高

司令官山下大将も山を下りてしまったのだ。一体これはどうなっているのだ……と。

我々は、だれの指揮に従えばよいのか。あたりに異様な空気が漂うようになり、ヒソヒソと小声で話を言葉も次第に語気が荒くなり、異常な興奮状態になってきました。「そんなことうそだ」「日本が負ける訳がない」「何のために、なんのために。今まで戦つて来たのだ。他の部隊はどうでもいい。我々は最後の一兵まで戦うのだ」と叫ぶ者もいれば、「戦友の死を無駄にしてはならない」と泣き叫ぶ者もいる。また、「第一線の我々は、玉砕を覚悟して戦っているのに、内地で降伏するとはもつてのほかだ。どうしても納得できません」などと、部隊の中はざわめきました。

将校、下士官、兵の区別なく上陸以来、数々の辛酸をなめ、勝利を信じて苦勞もいとわず努力してきたことが、その鬱憤が一度に噴き出し、頭は狂い、くやし涙がやせこけた頬を止めどなく流れる。赤土の地面を叩きながら無念とむなしさに涙は止まりません。

思えば、二年前の十月二十三日、私の弟が南支戦線

で戦死せりの悲報をきき、「よし弟の仇は必ず討つてやる」と意気込んで征途につき、フィリピン戰場に臨んだ私です。こんなことになって一体どうすればいいのか、夜空を眺めながら頭の中に祖国の両親の顔、肉親、身内、友人たちと次から次へと浮かんでくるが、その鬱憤をはらすことはできません。

そうだ、我々は敗れたのではなく、天皇陛下の命によつて山を下りるのだ、と自分で自分を慰めながら、自分の意志にならず、ことの成り行きに従うより外にありませんでした。

その後、虎兵团長尾崎中将の命令で、各部隊は興奮のあまり斬り死にしたり、自決したりせぬように、また軽率妄動の振る舞いの防止等の指令はあったが、停戦までは絶望の果て自決する者も相当あったのですが、停戦後は自殺する者はありませんでした。

米軍から指定された武装解除の日まで、あと三日しかない。隊の中も忙しくなりました。敗れたとはいえず、皇軍の名誉にかけても、残った兵器の手入れを十

分に行うこと、鎗を落とし、燦然と輝く菊の御紋章を米軍に見せてやるんだと。これが最後の兵器検査だといつて、各自一生懸命に磨いたものです。

次には戦死者の遺骨、遺留品の整理。戦死者の供養塔と軍馬の供養塔、これは私の役で赤松の木を切り、私の携行していた「相州住・綱広」の名刀で削り墓標をつくり、青鉛筆で「虎八五一〇部隊戦死者英霊の供養」と太字で記入しました。軍馬の方は、「虎八五一〇戦没軍馬の霊供養」と記入し、山の広場の小高い築山に、激戦地の山や、丘の見下ろせる見晴らしの良い場所に建立しました。更に、後々の事を考慮して、軍の重要な機密書類は一切焼却し、各人の軍隊手帳も焼却を命ぜられました。次に各人の身辺整理も終わり、最後の陣地の清掃までやったのでした。「立つ鳥跡を濁さず」の金言通り、男らしく、しかもゆかしい皇軍の名を、外国辺地の土地までも永く残して置きたい心情からでした。

あわたたしい数日間でしたが、なんとかやってのけすべて準備完了した。そして我が虎兵团の武装解除の

日が来、早朝五時ごろ、全員武装して広場に集合し、隊長の号令で東方を向いて、帯刀者は抜刀、執銃者は着剣、天皇の軍隊として最後の東方遥拝を行う。

「本日天皇陛下の命に依り米軍に対し、武装解除することになった。しかし我が虎兵団は戦争に敗れたのではない。最後の一兵になるまで、また玉碎するまでもと頑張ってきた。隊長始め全員そのように信じている事間違いない。そうでなければ戦死なされた戦友がかばれぬではないか……」。

最後に隊長の号令で、万歳三唱があり式は終了しました。白旗を先頭にして山を下り、キャンプに入るのであります。

ソロモン諸島コロロンバンガラ島 生き残りの強運

高知県 佐々木 重利

昭和十七年九月、旧久礼町・須崎町・半山村の若者と共に須崎小学校で徴兵検査がありました。禪一枚で軍医の前へ直立不動の姿勢で立ち検査を受け、私は久礼町五十六名の中で三人の甲種合格者の一名となりました。その晩は伊屋の森田さんの所で五十銭会費で随分ぎやかにお祝いをし、約一カ月後に各自の兵料と入隊日時の通達がありました。私は全く予想外の海軍という事です。

「昭和十八年一月十日、佐世保相ノ浦海兵団に入隊すべし」との命令書を受け取りました。当時は既に帝国海軍の精鋭も相当の痛手を受けていた時期だけに、海軍の水兵に選ばれたことは私にとり無常の喜びでありました。